

食育の推進に顕著な個人や団体を表彰している佐賀県食育賞が創設（平成19年度）後、  
 多久市から2団体が初めて表彰を受けました。その活動内容などを紹介します。

佐賀県食育賞（学校部門）  
 中部小学校



▲ピーちゃん委員会のメンバー

中部小は、平成10年度に健康教育総合モデル事業で食育の研究に取り組んで以来、家庭や地域と連携しながら、学校を核とした活動を継続。

児童の食への関心が高まり、食習慣の確かな定着を図っています。その年々の充実した活動内容や独自性、他校への波及性などが評価され、表彰となりました。



▲ピーちゃんデーに給食を会食する1年生と保護者（6月18日）

特長的なのは、『ピーちゃん』をマスコットとして幅広く活用している活動です。研究当初、児童に募集した食育キャラクターで、野菜の中でも嫌われるピーマンに愛着を持とうと考えたアイデアを採用、以来愛され続けています。ピーちゃんデーは、毎年6月に行う食育参観日。恒例のピーちゃん祭りの日でもあり、ピーちゃん委員会（5・6年生の給食委員）が企画・運営するイベントで、全校児童が楽しみにしています。今年は食育カルタ、紙芝居、豆つかみ、ピーちゃんに挑戦する腕相撲・棒引きを催し、どれにも参加自由。先生手づくりのピーちゃんしおりが賞品です。1年生のランチルームでは、保護者にも給食を試食してもらい、食事の内容や子どもたちのマナーを観察し、食育講話は「家庭でも役立つ」と人気。5時間目は授業参観で、1・2年生はお多福エプロン隊のエプロンシアター観劇、5年生は田植え体験、3・4・6年生は栄養職員や教諭から食育授業を受け、感謝して食べることの意味や、おやつのとおり方、給食の秘密などを学び、1日を通して食を考え、関わりました。

また、生活習慣を1週間チェックする『ピーちゃんがんばりカード』は、親子で生活習慣を見直す機会になり、食育通信の『ピーちゃんだより』の発行や町内の事業所などに手づくり食育カレンダーを配布するなど独自の取り組みが多彩で、ピーちゃんは先生たちの名前にも健在。市内全小中学校で食育指導を行う松山静花栄養教諭（中央中）は、「各学校では地域色豊かな食育に熱心ですが、中部小は児童自らが企画し、下級生にも教えたり、積み重ねて成長できる形や、地域に発信できるところがすごい。給食の残菜率はゼロに等しく、学年毎の畑では野菜も育っています」と。塚本泰徳校長は「継続が評価につながり嬉しい。今の形を長く続け、子どもたちの健康や人づくりにつながり、中学校区に広がればとも思います」と、子どもたちの将来を見据えた食育を大事にされています。



佐賀県食育賞（家庭・地域部門）  
 お多福エプロン隊

食生活を通じた健康づくりのボランティア活動を行うヘルスマイト（食生活改善推進員）がメンバーのお多福エプロン隊は、平成18年に活動が始まり、親しみやすい食育活動や地域全体の教育への貢献、県内全域に広がる期待などが評価されました。

笹川昌子さん（北多久町）が代表を務め、現在のメンバーは6人。多久の「多」と福祉の「福」を組み合わせた命名で、食の大切さを伝えることで、たくさんの福につながることを願って毎年、市内の保育園・幼稚園の全14園や3～5校の小学校などで、エプロンシアター上演や健康カルタ、食育紙芝居などを催しています。

9月14日に訪れたのは、青い鳥保育園。「野菜を食べて元気にうんちを出す」をテーマにした劇に、45人の園児が見入りました。物語は、「さて、人間の体は何からできているかな？」でスタート。主役のけんこちゃんの友達、たっくんは、元気がないし、うんちも出ません。たっくんは、けんこちゃんがなぜいつも元気なのか不思議で、2人はその秘密を探ります。食べ物をグループ分けしたイエロー君、レッドちゃん、グリーンちゃんが登場し、それらがどんな働きをするのか紹介。劇が進むと、たっくんは、「野菜を食べてないこと」が判明。そして、もう一つ元気の秘密「よく噛んで食べている」ことも分かりました。けんこちゃんは最後に「3つのグループの食べ物をバランスよく食べて、30回しっかり噛んで食べること」を園児と約束しました。この後、健康カルタを楽しんだ園児は「好き嫌いしないで食べるよ」や「面白かった」と大はしゃぎ。保育園からは「エプロンを興味深く使って、園児にも分かりやすく学べるストーリーや演技に感心。私たちも食育の勉強になります」と、毎年の来園が楽しみな様子でした。

市の福祉健康課と連携し、テーマやシナリオは毎年変え、台詞やアドリブは自学自習で身に付けるメンバーは、「劇がきっかけで食を学び、意識が変わった話は嬉しく、活動が認められた表彰は励みになります。アイデアを出しながら、今後も頑張りたい」と、意欲的でした。



▲青い鳥保育園の園児も加わったエプロンシアターの一場面